

3

◎第3回 2022年2月23日(水・祝) 19:00~20:30

「支援から主体的に変えるICT×身体メディアの学習は可能か？ーインクルーシブ教育時代の新しい表現と学び」

登壇者: 布山タルト(東京藝術大学)×松本祐一(同)×山城大督(京都芸術大学)×大内進×茂木一司(司会)

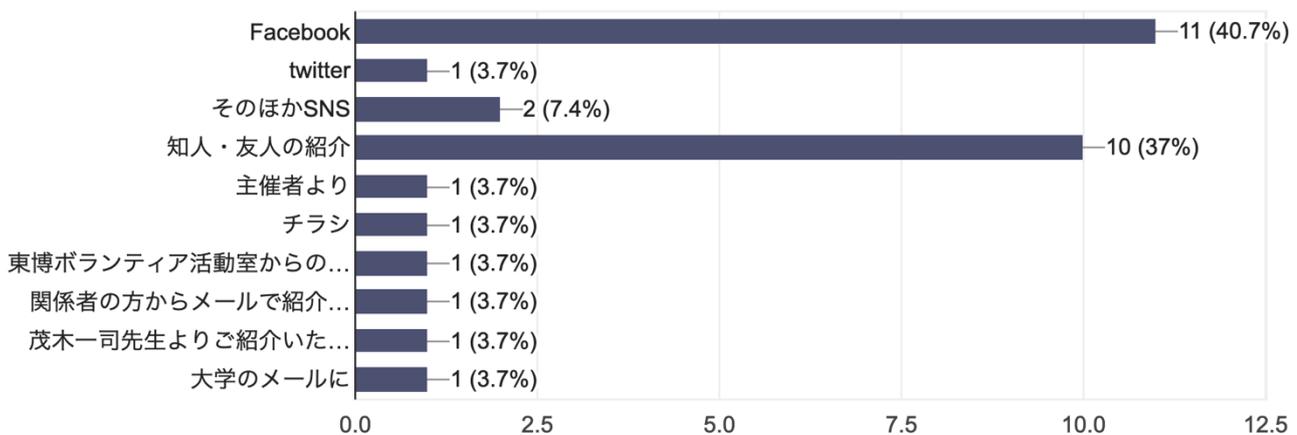
【アンケート3】『視覚障害のためのインクルーシブアート学習:基礎理論と教材開発』出版記念オンラインイベント(回答)

結果まとめ

出版記念オンラインイベント(回答)

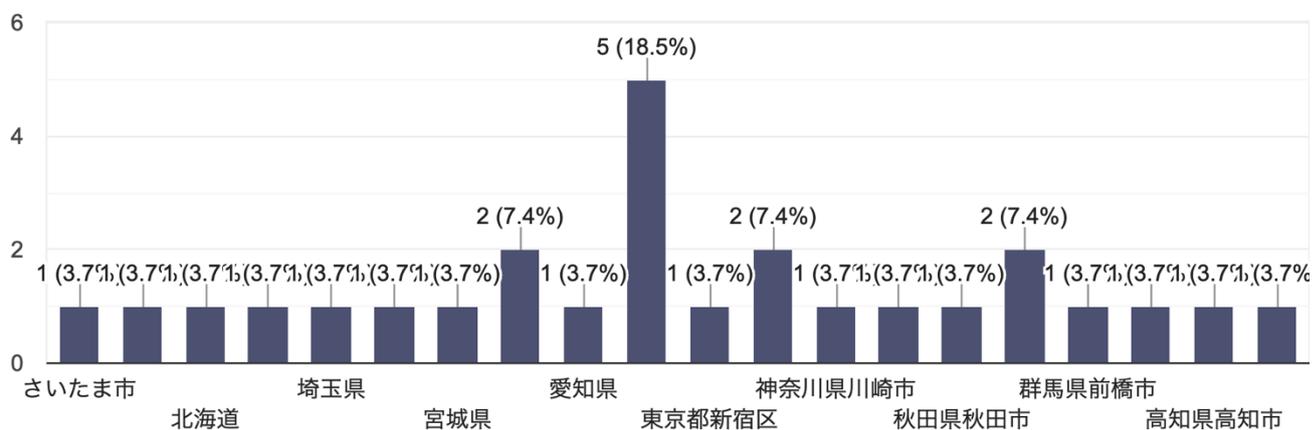
1.このイベントのことを、どのようにしてお知りになりましたか。

27件の回答



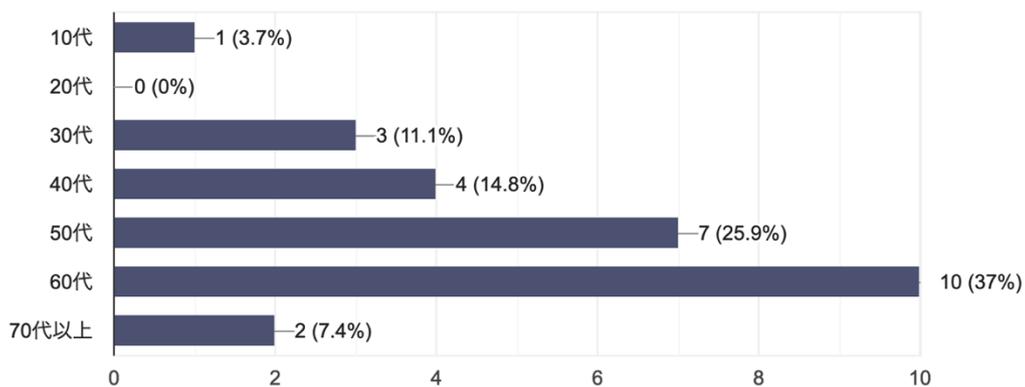
2.どちらにお住まいですか？

27件の回答



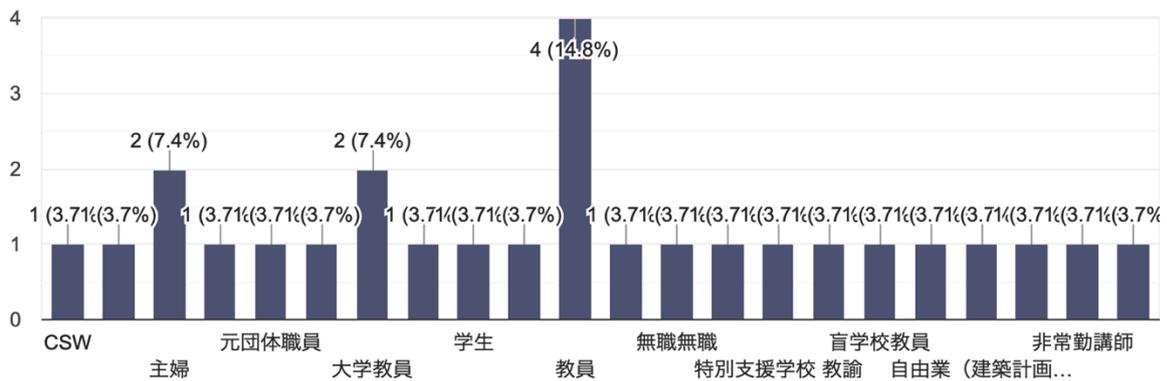
3.ご年齢を教えてください。

27件の回答



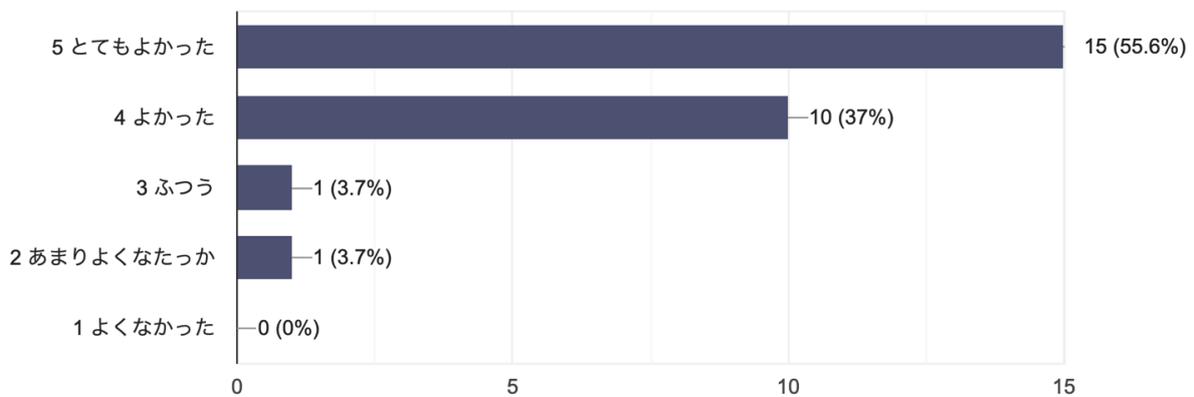
4.ご職業を教えてください。

27件の回答



5.本日のイベントはいかがでしたか？

27件の回答



6.ご意見・ご感想・ご質問など

ありがとうございました

アーティストの方の身体感覚として取り組みが大変興味深いと思いました。

本日も、ありがとうございました。

毎回色々な視点からインクルーシブアートを考え、研究されている登壇者の方のお話を拝聴でき、本当に面白いです。

今回は、学校現場を飛び出してアーティスト目線でのインクルーシブアートということで、とても刺激的でした。アートの世界も、目で見るだけではなく、額縁に入った絵を眺めるのは、もう古いなんて思ってしまったくらい、色々な感覚を使って、みる人を刺激する。あるいは、自分を再認知するような研究をされていて、それが学校現場に入ってきたら、とても面白いただろうなと思いながら聞いていました。

また、お話を聴きながら、特に障害を持った方も楽しめることを考えることは、全ての人が楽しめることに繋がるなと思いました。

次回も楽しみにしています。ありがとうございました。

触るアイテム、音を出すアイテムなど見える人でも楽しめるものが面白かったです。

インクルーシブがうまく絡んでいなかった

前者3名は“アーティスト”，つまり自身の感覚や感じ方をもっとも大切に、それを発表することを生業とする方たちであり、障害とともに生きようとする姿勢をあまりお持ちではないように思いました。とくに、山城先生が目の不自由なご友人の使用されている点字ディスプレイを「本が読める機械」とおっしゃっていたことに驚きを覚えています。大内先生のお話をもっと拝聴したかったです。第1,2回目はとても充実した時間をいただいたように感じていましたが、今日の回は少しがっかりしました。

知らないことばかりで驚きました。職場でも紹介したいと思います。第一回を拝聴したあと、すぐに本をお願いしたら届き、嬉しく思いました。

先週、5年生で粘土の学習をしましたが、視覚に頼った生活をしているせいで、立体感覚や触覚が鈍ってきていると感じたところでした。それをすごくマイナスに感じてしまっていたのですが、今日のお話をきいて、

もっと、触覚をたのしんでつかえるような、授業を創造したい、と考えるようになりました。

粘土の曲線から音楽、感覚を研ぎ澄ます話、アニメーションを触覚で味わうとか、もっともときいていくなりました。まともませんが、とりあえずお礼まで。

ありがとうございました。

次回、庭園美術館のようこそのお部屋の斎藤さんがお出になられるようで、楽しみです。

今回も興味深いお話ばかりで、アートの可能性を感じました。

運営に関して：お話が途中で切れてしまうのがもったいなく感じました。

布山先生、山城先生のお話の内容がとても新鮮で新しい可能性を感じました。現代アートやメディアアートなどの新しい表現の試み(実験)が今後ますます重要になってくると思えました。本日もありがとうございました。

興味深い内容でした。

3Dプリンターを利用したアート鑑賞は視覚障がいではない私でも参加してみたいと思えました。

晴眼児を対象に教師をしていましたので、写真美術館に引率して、ゾートロブやコマドリアニメを作成させてもらったことなどを懐かしく思い出しました。多様な御開発を期待申し上げます。

アニメーション

例えば音的なフィードバックに触覚的なものが加わるとさらにいいなと思えました。ハンズアニメーションなどで、たとえば触覚ディスプレイ(機器に関する最近の動向は分かりません)とつながると面白いと思います。

えがく譜

子供たちもきっと喜ぶと思います。例えば、丸いシールを貼ったり太さいろいろのマスキングテープを貼ったりして触覚的なフィードバックができると全盲の生徒でも簡単に楽しめると思えました。

インスタレーション

重低音と低音を使ったインスタレーションについて、全身で感じる心地よい音と振動に興味があります。和太鼓などの音と振動は視覚障害の子供たちも好きなので。

映像を知らない近代以前のひとが映像をみたら魔法だとおもうでしょう。わたしは映像を知っていますが、今日見た、棒が音をひろっていくようなのは魔法だとおもいました。コンピュータは理屈の積み重ねでできているんだからと思っても、やっぱり魔法のようなのです。見えないひとが包丁を上手に使って調理するのも、私には魔法のようにおもえます。自分がしらない・わからない・追体験しにくい感覚や、技能をみせられると、驚くし、たのしいし、しぜんとリスペクトする気になります。そんなわけで今日はとても楽しくおもしろかったです。

布山タルトさんがやって見せてくれた片手の指を折るしぐさは、やってみると意外に難しいものもあり、特に薬指1本たてると薬指と小指だけたてるとかは、やりにくいですが、手話を使っている人は、難なくキレイにできるとおもいます。またわたしは頭がわるいので、指の一本一本に記号をつけて、その組み合わせを紙に書きだして確認しましたが、そんなことをしなくてもすぐわかる方法があり(ここには書きませんが)中学入試なんかで出されそうです。わたしは指を折る・紙に書くというアナログな作業を経て、それに気づいたのですが、そんな作業なしに(体を使わずとも)抽象的に考えてパツと答えを出せのがデジタル頭？なのかな。後者の方が現代社会向きなんでしょうけど、このイベントのテーマに沿って言えば、両方あっていい、いや両方あるのがいいんですよね。

前日に申し込んだため、失礼いたしました。4回目は拝聴できると思います。よろしくお願いします。

東京芸大や京都芸大の先生方のお話を伺い、こういう分野が研究の対象となる時代がきたことをうれしく感じました。こうした研究が視覚障害の児童生徒の教育に生かされる日があることを楽しみにしています。(先生方が視覚障害の方の特性に通じるようになるのとさらに研究が深まるように感じます。)

視覚障害の方にとって(もしかするとそれ以外の私たちにとっても)、触る力を培うことはとても大きな意味があると思います。ユニバーサルミュージアムにも展示されていたネフ社の「タッチテスト」のように異なる素材を触察で組み合わせていくようなおもちゃが何かに応用できるのではないかしら？と感じました。

大内先生の3Dプリンタのお話はとても興味深く、もう少し時間があればと残念に思いました。またいつかお話を伺う機会があればうれしいです。

申し込みをしたのですが、事情があって参加できませんでした。後日、期間限定等で、当日の様子を視聴できる機会があると大変嬉しいです。

講師の先生方、ありがとうございました。特に絵を音で表現するプロジェクトがとても興味を持ちました。視覚障がいの有無にかかわらず、楽しめると思います。3Dプリンターの活用もさらに進めば、触覚活用も進んでいくと思います。著作権問題などクリアできれば良いです。

デジタルの未来に、楽しさをもって取り組んでいる様子がとても良かったです。少し話がずれますが、見えにくい方たち自身が様々なツール開発に参加するのもおもしろいかもしれません。3次元コピーは見えにくい人、見える人どちらにも作品理解に役立つツールなので、有名作品ならば量産化してもらえば、価格が押さえられて良いのではないのでしょうか。

今回のオンラインイベントの1～3回を視聴させていただきました。視覚障害と美術に関わるさまざまな専門分野からの貴重なお話しばかりで、とても興味深く、新たな学びの多い機会となりました。有難うございました。私は長く視覚障害教育に携わってきましたが、美術の第一世代と称された千葉盲の西村先生や宮城県立美術館の齋さんの活動にワクワクしながら過ごしてきております。私は特に視覚障害児の早期の支援、指導の実践が長く、美術教育は幼児期から始まっているとの思いがあります。見えない、見えにくいお子さんは事物の形態を把握し、理解できることが求められるのですが、その行為は知りたい探求心や分かった喜びがあって生ずるもので、幼児の生活や活動に意欲や感ずる心の育ての大事さを唱えてきました。美術図工教育がこの科目にとどまらず、他の多くの教科と連携して新たな発展をとのご提案に心を動かされます。幼児教育は教科に分けずに子どもの全体発達を目指す指導法ですから、美術や芸術が教育として人が生きるために必要とされていることと、相通ずるものがあります。茂木先生が結び付けてくださった関係の皆様今後の益々のご発展を期待しております。

いろいろなアプリを紹介してもらいよかったです。

視覚障がい者だけでなく多くの人の主体的な学習につながるヒントがあるお話でした。

今回は、ICTを取り入れた様々な実践・取り組みについての話を聞くことができ、大変勉強になりました。

実際に盲学校の美術に関わる立場として、取り入れてみたい実践もありましたが、現実では

授業時間数(中学部は週1回の授業)、予算、生徒の実態などを考えると難しさも感じました。強度弱視の生徒や全盲(中途)の生徒達から、筆を使って絵具を使い絵を描きたいという声をききました。粘土を使えば良いかという粘土でも視覚を使う面があったり、認知の面で育ててあげる部分があり粘土が視覚を使わなくてもできる訳ではなかったり。では、美術の中で何をしていけばいいのか、生徒ができないことを探すのではなく、どうしたらできるのか、美術を通して得られる経験を増やしていけないのか、新しい手法や技法を取り入れられないか、そんな可能性を含め教員の方がチャレンジしていく気持ちを持ち続けることが大切だと思いました。

新しい研究が進み、ICTで新たな取り組みが進められているとのこと。身近に気軽に授業に取り入れることができるように情報の共有が進むと良いと思いました。

アートの部分での可能性を感じた。山城さんの認知などのとらえ方や興味が、お子さんが生まれたことで自分事となって、という部分が共感できる。

皆さんの気持ちを込めて発表する姿をみていると、自分も意欲が湧いてきました。さまざまな専門の方からのお話を伺えることは大変刺激になり学びがあります。

デジタル技術を使った取り組み、アーティストによる取り組みは私にとっては身近でよく見る事例ですが、そういった事例は、とても面白いものであっても、コストや人手などの面で、継続して行うことが難しく、1～数回やって終わることが多くなります。(自分が手がけたものも同様です)こういった試みを継続するための仕組みを考えたいと思っています。